
希望の光 外伝

raito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望の光 外伝

【Nコード】

N7851R

【作者名】

raito

【あらすじ】

本編の「希望の光」の外伝バージョンです。

主に本編では載せていない、視点、空白部分を書こうと思います。本編とは違って完全に暇潰し感覚で書きました。（つまり短い）気になる方は覗いて来てください。

最初の出会い（前書き）

本編、第一話「第一話 最初に出会ったのは…」の
チルノ視点でお送りします。

最初の出会

【チルノ視点】

「大ちゃん！ 鬼ごっこしよー♪」

今日、あたいは珍しく早く起き、大ちゃんを鬼ごっこに誘っている。

早起き出来るなんて……あたいたらさいきよーね！

「でも、2人だけ？」

「気にしない、気にしない！ じゃあ鬼決めるよ♪」

あたいは半ば強引に決め、ジャンケンの形を作った。

「最初はぐー、じゃんけん……」

「よし、よし！ すごい遠くに行くぞー！」

結果、あたいはぐーで勝った。やっぱり、あたいたらさいきよーね！

「魔法の森までだけど…」

もっと遠くに行って捕まらないようにしないと…。

「そうだ！ あの建物（紅魔館）に隠れさせて貰えば良いんだ！
あたいったら天才ね！」

あたいは魔法の森を出て、霧の湖に着き、建物に向かおうとした。

「ん？ あそこにいるの誰だろう？」

あたいのちょうど、左側にでっかいカバンを背負った、黒髪の男
が湖を見て満足そうに笑顔を浮かべていた。

あの笑顔から見ると、もしかして……

「ここを荒らしに来た、悪い奴！？」

ここを襲われるわけにはいかない！ あたいが、倒さないと！

「そのあんた！！」

これが後に好きになる、あたいと赤池優也の出会いだった…。

最初の出会（後書き）

本編とは違って完全に手抜きです！
ご注意ください！

まだ俺たちは、こんな感じ（前書き）

本編、第二話「第二話 幻想郷？」の続きです。

まだ俺たちは、こんな感じ

「チルノ……迷ったのか？」

「そ…そんなことないもん！ 道が避けただけだもん！」

言い訳にしたら、すごい無理があるな…。

「ユーヤがいるから、分からなくなったんだよ！」

「すげえ理不尽だな！ オイ！」

お前が迷ったのを、俺がいたからっていう理由にするな！！

「あのー…私が空中で見えますから…」

「ありがたい！ どのかの？とは大違いの頭脳だ！」

「あたい？じゃないもん！」

「そ…それじゃあ行ってきます」

大ちゃんは空中に浮き見えなくなった。

残された俺とチルノは、言い争いをして時間を潰した…。

「分かりました。ここを右です」

戻ってきた大ちゃんは、チルノの代わりに案内してくれた。最初からこうすれば良かったな…。

「何？ ユーヤ。何か言いたいことあんの？」

チルノは俺を睨みながら、聞いてきた。

「いや、同じ妖精でもどうしてこんなにも違うかなーと……ハッ」

しまった！ また余計なことを…！

「むきー！！ またバカにしてー！！」

その後も、俺たちは大ちゃんにげんこつを食らうまで言い争いをしていた…。

最初の俺たちはまだこんな感じ…。

まだ俺たちは、こんな感じ（後書き）

喧嘩するほど仲が良い……よく言ったものです。

タダなのかー（前書き）

本編、第三話「その前に腹ごしらえ」の、チルノが100本団子を食べた所です。実は：

タダなのか！

「おいしいな。この団子！」

「何個だって食べられるわよ！ あたいたらさいきょーねー！」

そんなことで、自慢しないでいいから！ 女性に言うのは何だが、
太る気か！？

俺は呆れた表情で、チルノに目をやると…。

「あ…チルノちょっと動くな」

「ん？ 何？」（もぐもぐ）

ティッシュを使い、チルノの口元を拭いてあげた。

「団子のタレが付いてたぜ。まったく…落ち着いて食べろよ」

「べ、別に気づいてたもん！／／／／」

この反応は、絶対気づいてないと見た。それに服にもちよつと付
いてるぜ…。

その後、しばらく食べ続けて、だんだんお腹もいっぱいになってきた。

「そういえば、ここに来てトイレ行ってなかったな……二人とも少し空けるよ」

俺は席を立ち、トイレへ…。

【チルノ視点】

あれ？ ユーヤがいない。トイレにでも行ったのかな？
そう思いながら、団子の二段目を食べようとした……瞬間、

「なんだって！！ お金持っていない！？」

この店の店長の怒鳴り声が、聞こえてきた。あたいはびっくりして椅子からちよつと浮いた。

「タダじゃないのかー？」

「当たり前だ！！」

怒られてる声にあたいは聞き覚えがあった。

あたいは振り向くと、怒鳴られていたのは：

「ルーミア！」

「あ！ チルノに大ちゃんなのかー！」

あたいの親友、ルーミアだった。あたいと大ちゃんはルーミアの所に：

「どうしたの？ ルーミアちゃん」

「それが、今日タダだって”てゐ”に聞いてここにやって来たのだー。絶対タダなはずなのだー！」

大ちゃんの質問に怒りながら返すルーミア。それって騙されたんじゃない？

「とにかく払えなければ、ここで働いて返すしかないなー！！」

「そ…そんなー」

涙目でルーミアはがっかりしてる…よし！

「大丈夫だよルーミア！ あたいたちが払うからー！！」

「も、もしかして…チルノちゃんダメだよ！ 優也さんに失礼だよー！！」

「ルーミアの分も、あたいが全部食べたって言えば大丈夫だよ！ それでいいよね、てんちよー！」

「あ……ああそれなら……」

予想外のあたいの言葉に驚いてる……。あたいたら天才ね!!

「ちなみに、何本なのルーミアちゃん？」

「90本なのかー！」

ちなみにユーやは、このことを三日後に知った。

タダなのかー(後書き)

まさに、そうだったのかー！
チルノは実際、10本しか食べてません。

驚異の観察力！（前書き）

本編、第四話「そんな…」の
博麗の階段に着く前の話です。

驚異の観察力!

【大妖精視点】

「何? おぶってほしいだど?」

「うん! 100本食べて、もう動けない…」

チルノちゃん…。そんな本当に食べました、みたいに振る舞わなくても…

「……たつく仕方ないな。ほらチルノ、乗れ!」

優也さんの顔を見ると明らかに”ふざけるな〜!!”って心で思ってたと思います。

でも、それを間近で言わずに受け入れるなんて立派です!

「よいしょ……何だお前、重いな」

ちよつと前言撤回です…(汗)

「ちよ…女の子にそんなこと言うな／＼」

うん、うん、チルノちゃんも?と言いながら女の子なんだから、ここは、ビシッと言うべきだよ!

「冗談だよ……お前軽いよ」

「え…えつと…あたいは団子100個食べたはずだから、重いんだ
!! ユーヤに気を遣われても嬉しくないもん!!」

チルノちゃん、ここは普通に”ありがとう” って言った方がいい
んじゃない。

「まあ、そんなに食べちゃあ重いと思うけど、お前だと重い感じは
全然ないから安心しろ♪」

優也さんは、笑顔でチルノちゃんに答えた。結構、眩しいな〜!

「え…あ…ゆ、ユーヤ速く進んでよ／＼／＼」

チルノちゃんが赤くなってる……もしや!?

「はい、はい……じゃあ行きますよ。大ちゃんも行くよ」

「はい♪」

ユーヤさんは気づいてないけど、私はチルノちゃんの変化に気づ
いた。そして、こう思った…。

チルノちゃんが、優也さんの事を好きになるんじゃないかって♪

驚異の観察力！（後書き）

大ちゃん凄すぎる…。

わずかな変化も見逃さない！

筆者が子供たちに教えたこと 前編（前書き）

一気に飛んで、本編、第十一話「妖精たちの緊張」の大ちゃんの、前の授業です！

何の授業かは「国語」（笑）です。

今回は、神の視点で行こうと思います。

正直に言いましょう・・・・・・・・カオス回です♪

筆者が子供たちに教えたこと 前編

r a i t o 「みなさん。こんにちは」

「「「「こんにちは！」」「」」」

r 「あいかわらず元気いいね♪ それではプリントを配るよー」

子供たちは、待ってましたとばかりにすぐにそのプリントを見た。
あちらこちらの生徒の目が、きれいに輝いている。

r 「では早速…D君」

D 「え〜！ 僕です…ぶは！」

やや痩せていて海のように青い髪の子が勢いよく立ち上がったせいか、机に頭をぶつけた。

r 「D君、落ち着いて…」

Dの行動にクラスの大半は爆笑していた。

D 「そんなに笑わなくても……じゃあ読みます」

Dはそう言うと、笑ってにぎやかだった教室がシンと静かになった。

103話 【宣言】

奇妙な光景だ…。

この倉庫にいる全ての人間が、今、入ってきた一人の人間に向けられている。

その人間の動作に固唾を飲んで見ているのが、誰が見ても分かるくらいだ。

「35。36。37。38。39！」

魅上が次に40と言う前に、月はニアに向かって高らかと言った。

「ニア、僕の勝ちだ！」

「40！」

D「先生、ここまでですよね」

r「はい、ありがとう！ では次は…O子さん」

○「はい！」

raitoは茶色のツインテールの少女を指名した。少女は立ち上がり読み始める。

一分は経った……それでも死んだ者は誰もいなかった。

日本警察の松田ですら、死ぬと思っていた…。

「死まない……一分は経った。死まない！」

月は啞然としていた。計画が狂った瞬間である。

「だから、ノートに書いても死にませんと言ったじゃないですか」

ニアは分かっていたかのように、冷静に答えた。
月に従っていた魅上は、この予想外の事態に驚いていた。

「な……なぜ…なぜ死まない！？ か、神！ 私は仰せの通りに！
！」

「レスター！ ジェバンニ！ 魅上を！」

「うわあああ…」

魅上は、悪が自分を捕まえてこうとすることによりうろたえた。

「ひええええ…」

魅上は二人に押さえ込まれ、手錠をかけられた。
そして、捕まえた魅上の手からノートを取りだした。

「ジェバンニ、ノートを…」

ニアはノートを受け取り、しばし自分の目で見て確認し、その後、
日本警察側に見せた。

「自分たちの目で確認してください。

上に書かれてるのは、私たちSPKの名前で間違えありません。
そしてここにいて、名前がないのは………夜神 月」

r 「はい、ありがとう」

” ザワザワ ”

r 「読んで貰って、分かるように月の計画は崩れました」

r a i t o は、黒板にこれまでの流れを書いた。

r 「月はこのように、策は建てていた。では、なぜそれが崩れたの

か…」

そう言うとき、教壇の下から、さっきとは別のプリントを教壇に置いた。

r「じっくり続きを見ようじゃないか♪」

筆者が子供たちに教えたこと 前編（後書き）

一番やってみたかった、漫画やアニメの部分を小説化にしちゃいました♪

筆者が子供たちに教えたこと

後編（前書き）

前回の続きです。

筆者が子供たちに教えたこと

後編

r「さて、それでは続きつと…」

r a i t o は2枚目のプリントを配り終え、皆を見渡した。

r「じゃあ、P子くん」

P「いや〜ん♪ 私〜？」

次に指名したのは、顔立ちは男なのに口調は女の少年だ。いわゆる”オカマ”である。

r「ああ。頼む」

P「もう♪ しょうがない子ね♪」

クラスのみんなは、もう慣れているのか、彼の言葉使いに一々反応はしなかったものの、どこか引いている顔にはなっていた。

そんな事は気にせず、彼は読み出した…が、

P「わ……罨だ♪ これは罨だ♪」

r「ストップ！ やっぱり良いや。ここは俺が読む」

p「いけず」

あまりにも迫力がなかった…。

r「みんな。俺の音読を良く聞くように」

今度は r a i t o 自身が読むらしく、息を大きく吸い読み始めた…が、

r「わぁ…バナナ（罠だ）！ 粉バナナ（これは罠だ）！！

ニアが僕を落とし入れるために仕組んだ罠だ！！

ノートに人を書いても死なないということは、おっかしーじゃないか！！

それがバナナ（罠だ）という証拠！！！」

こっちはこっちで迫力がありすぎて、言葉になっていなかった…。

r「せめてこれくらいじゃないと！」

((((先生…普通に読んでください…))))

クラスのほとんどの思いが1つになった瞬間だった…。

その後、別の生徒に読んでもらい、今回の小説の終わりまで来た。

A「そうだ…：僕がキラだ…。

先生、読み終わりました」

r「はい、ご苦労」

”ざわざわ”

読み終えた途端、クラスがざわめき出した。
それぞれ納得した顔、そうでない顔、いろんな表情がうかがえた。

r「さて、それでは読み終えた感想でも聞こうかな？ それじゃあ、
♂ぎくんどうだった？」

♂「私〜？」

♂P子と同じく、口調が女の子の少年に聞いた。ちなみに、P子と
♂ぎは双子である。

♂「そうね〜…。このときの月ちゃん、どんな服装していたの？」

r「……スーツだ」

r a i t o は半ば呆れた表情で答える。どうやら、一回や二回の
質問ではないらしい…。

♂「私的に月ちゃんの服装をスーツじゃなくて、ワンピース（女の
服装）にしたら、もっとインパクト出てたんじゃないかしら？」

r「……」

”それはそうだが、それじゃお前とPと同じオカマだ ” っと r
a i t o の表情からして、見て取れた。

r「えっと…W君はどうだった？」

♂「ちよつと〜。私の意見は〜！」（プンプン）

♂ぎは完全にスルーして、今度はややぼっちゃり系の男の子Wに

聞いた。

W「そうだな～…月の作戦が看破されたのは予想外だったな～。正直、月が勝つと思ったもん！」

「そうだよな～」

「信じられないもんね～」

「予想外です」（ソフ○バンク風に）

r「確かに月の作戦は完璧だった……だが、これだけはみんな覚えてくれ」スゥ

r a i t o はここで区切りをつけ、また大きく息を吸い言った…。

r「説明は死亡フラグだと!!！」

r「あ！　これテストに出るからな」

((((ええー！？))))

何とも無茶苦茶な先生である…。

何だかんだで、授業も終わりに近づいてきた。

r「そろそろ授業も終わりそうなので、いつも通り最後に簡単な質問を受け付ける。何でもいいぞ。今回は何を聞きたい？

お！ O子さんなんだい？」

O「今回、先生が一番気に入った場面はありますか？」

その質問に r a i t o はしばし考える仕草を取り、やがて口を開いた。

r「いろいろあったが、今回俺が気に入った場面は…

” ジェバンニが一晩でやってくれました ” だな♪」

筆者が子供たちに教えたこと

後編（後書き）

え〜と…この後、大ちゃんの授業に入りました♪

しかし、ひどい授業だ…。

あゝあ・・・・・・・・(前書き)

本編 第十一話「妖精たちの緊張」で

大ちゃんの授業です。

あゝあ・・・

【大妖精視点】

私の初めての授業が始まった…。

「それでは、教科書の40ページを開いて下さい」

今回の授業の内容は、「かけ算の応用問題」、
最初、私は7歳の少年少女に教えるのは結構早いペースだと思っていた。ただ、実際はこれでも授業のペースは遅れてるらしい…。

原因はシブタク先生が、ほとんど、授業に関係ない話をしていて進んでないとか…。

(と、すると…)

「えーと…ごめんね。」

そこに行く予定でしたんですけど、その前にみんなは九九や十の位のかけ算はできるかな？」

” そんなの簡単だよ”

” 目をつぶってもできるよー”
” あなたへの気持ちが九九です♪”

ほとんどの子ができるって言ってるけど本当かな？

「本当〜？ それじゃあ、まず最初にこれをやってもらおうかな？」

私は教壇の上に置いてある、一枚のプリントを手に取り言った。
みんなは何だろうって目でプリントを見ていた。

「大ちゃん先生。どんなプリントなんですか？」

「見てからのお楽しみだよ。気楽に説いてみてね♪」

数分後、プリントは全員に行き渡った…。
ちよつと心配だったけど、プリントを見たみんなの反応は…。

” やつべえ！ すげえ面白そう！！”
” でも、結構難しいかな？”
” 僕はあなたしか見えない！！”

意外に好評だった。
私はホツとし、作って良かったという気持ちが湧いた。ちなみに
プリントの内容は…

優也さんの世界で言う、100マス計算!!（だっけ？）

実はこれは、もしものに優也さんが作ってくれたプリント…。

（いや：「教師がシブタクだから、絶対必要になる」って言ってたんだっけ…。

でも優也さん。シブタク先生のこと知ってるような感じに聞こえたけど何でだろう？）

答えは……シブタクは某漫画の暴走族で、やられキャラだからである！

（まあ、いいや）

「えーと、まずはみんな時間制限なしでやってみようね」

「「「「はーい」「」「」」」

数分後…

「こ…これは…」

凄い…みんな…。

ほとんどできてなーい!? その前に、九九の6段で止まってるー!!

「ひどいな。これからは渋谷丸先生の授業は、毎日目を光らせないと…」

点数を見るために来た慧音先生も呆氣にとられていた…。

「ど…どうでしょう…?」

「そうだな…。予定変更で大妖精は九九の段の最後までをみんなに教えてくれ。私はっと…」

「ど、どこに行くんですか?」

「ああ。この件で校長に報告に……ちよつとの間、私は空けるから、その間しっかり頼むぞ」

頼むぞって……そんなあ、一人にしないでくださーい（涙）
そんな私の心の叫びは無視され、慧音さんはドアの所に…。

最後は取っ手を掴み、顔をこちらに向け……

「みんなー。私は少しはずれるから迷惑のないようになー。
後、大妖精……大丈夫だ、問題ない」

どや顔で教室を出て行った…。

これって、明らかに大丈夫じゃないですよー！ 何か後で起こりますよね！？

（しょ…しょうがない！ やってやる…）

「えーと、まずプリントを返します…。

ほとんどの人が九九の6の段で止まっていました。だから私が九九の最後まで教えます。

分かりにくいかもしれませんが、みんなよろしく…」

この後、私は分かっている子に丁寧とその段のことを教えました。最初は少し堅かったけど、今は慣れ始めています。

よ、良かった…。何とかなりそう。さて、次の子は…

「♫ぎくんも6の段だね」

♫「先生。その前に質問いいかしら？」

♫ぎくんは男なのに口調が女という少し変わった生徒。
そんな子が私に……何だろう？

「うん。いいよ」

「先生って”胸”結構あるわよねー。何カップ？」

「Cカップだよ」

……え？ あれ？ 私は今なんて……？

♫「Cカップ……でかいわねー。じゃあ次、身長は？」

「1メートル40センチ……！！」

い……今、私の口が勝手に……！？ どどどどど、どうなってるの……？

P「♫ぎく♪ 先生動揺してるみたいだからネタバレしないと♪」

♫「そうね。私の能力『本当のことを話させる程度の能力』よ。つまり私に嘘は言えないのよ先生く♪」

そう言うところぎは、ポケットから黒い手帳を取り出した。

♂「ブラックリストよ。P子以外の寺子屋の生徒、先生のデータが全てそろっている…。

寺子屋は私たち二人の学園そのものよ。radio先生はまだだけど…」

P「パラダイス♪」

な…何なのこの二人…！？　だ…誰か助けて…！！

♂「無駄よ。この生徒は私の良いように動くわ。ブラックリストがあるからね。

それに、みんなは先生の情報を聞きたいんじゃないかしら…♪」

” うん。聞いてみたい！”

” 秘密とか何かあるのかな？”

” ゲフンゲフン！”

(うそー！！！)

♂「決まりね。次…：…体重は？」

「2じゅ…：…！」フガ

い…：…言わないよ！　絶対に言わないよ…！！

♂「20…：…ちょっとかしらね？　次…：…決めセリフ」

「ピッカチュウ♪／／／／」

「「「「か・・・かわいい・・・」」」」

（は…恥ずかしい…／／／／）

♂「ピカチュウね…」

（raito先生は「サンドパンは俺の嫁だー！！」ってそれを見るたび”に言ってたけど…ポケモン流行ってるのかしら？”）

♂「それじゃあ次でラストにしてあげるわ。今日の下着の色は…？」

「！！」フガフガ…

♂「ほらほら〜♪ 言った方がスッキリするわよ〜♪」

（スッキリしないし、恥ずかしいよ！／／／／）

私は必死に口元に手を塞ぎ、言わないよう努力した…けど、

♂「もう一度言うわよ…今日の下着の色は…？」

「……………です」

♂「ん〜？ 聞こえないな〜…」

「きよ、今日のし……下着の色は……両方とも白です!!」／／／／／
／

”ブーーーー” ↑誰かの鼻血の音

(…………／／／／／)

♂「ふむふむ……白ね♪ 貴重な情報どうもありがとうございました
」

○「ちょ、ちょっと♂ぎやりすぎよ! 早く謝らないと!!」

♂「何よ○子。私に指図する気なのね? そんなこと私にしたらどうなるか…」

メキメキ…

♂「……え？」

突然♂ぎの近くで聞こえた不気味な音……。その音を出した犯人は……

「おっすっぎっくくん♪」

大ちゃんでした！

大ちゃんが持っている鉛筆が……。折れずに押しつぶされていた……！

顔は笑顔で保っているが、目が全然笑っていないのがクラスの誰から見ても明白だった！

「ちょくくと、いいかな？」ゴゴゴ……

♂「い……いや……私、急用を思い出して……」ガタガタ……

「ナニ、スグスムヨ。チョットイタイケドネ……」ゴゴゴ……

♂「ちょ……ま………アッ……！！！」

ゴキン!!

【慧音視点】

「ふう〜……大分遅くなってしまったな。大妖精は上手くやっているだろうか？」

ガラガラ…

「みんな凄いよ！ 完璧だね♪」ニコニコ…

「」「」「あ、ありがとうございます…」「」「」

お！ どうやら上手くやれているようだな…。

しかし……♂ぎのあのでかいたんこぶはどうしたんだ？

あゝあ……（後書き）

この後、授業がスムーズに進みました…教師顔負けの。
恐怖への支配…まさにこのことだな。

それにしても……大ちゃんは白か…（ニヤニヤ）

大「い、言わないでください!!／／／／／」

トラウマはこうしてできるものだ、改めて思い出させてくれたな。
いやー…おも”しろ”い!!（ニヤニヤ）

大「~~~~~／／／／／」

閃いたアイディア (前書き)

久しぶりの外伝

本編がちょっと暗いので、外伝は明るく行こう！

今回の話しは、宴会の一日前の話です。

閃いたアイディア

【文視点】

「あゝ…良いネタないですねゝ…」

毎度おなじみ射名丸文しゃめいまるあやです！

現在私は妖怪の山にて、自分のネタ帳のつまらなさに嘆いている
ところですよ。

「一応あるとしたら、今日取材してきた外来人と、明日博麗で宴会
だけですかね…」

「文さーん…いい加減、刀返してくれませんかー…」

私のちょうど左側で犬徒いぬばしりが少し疲れた表情で言っているのが見
えた。

椀の刀を借りて何をしてるかと言うと、刀を地面に突き刺し、座
ってそこに寄りかかってるんですよ。

「いやゝ、悪いですね椀。寄りかかり心地が良くて♪」

「私の刀はソファ代わりですか…」

そんなことしていると、自然に老化が進みますよゝ…」

こ、この私が…老化！？

「そうですよ。こういう積み重ねが老化を引き起こすんですよ。文さんは油断してるようですが、後で一番早くおばあちゃんになっても知りませんからね!」

お：おばあちゃん!? い：言ってくれますね…。

「もゝみゝじゝ：覚悟は出来ますかゝ…」わきわき

急に立ち上がり少しずつ近づいて来る私に、椀は慌てて後ずらした。

「な：なんで手をわきわきさせてこっちに来るんですか…?」

「なんでって：決まってるでしょう♪」

私は駆けだした!!

もみもみ…

ハッ…!

「くっ……また、大きくなったですか！ 椀！」

椀の後ろに回り込み、胸を揉んだ。

相変わらず……相変わらずなんですネ！ 椀イイイ！！

「うひゃん！／＼／＼ し、知りませんよ！！／＼／＼
さ……さっきのことは謝りますから許して～！／＼／＼／」

「そんなことはどうでもいいし、可愛い声出しても無駄です！ 言わないと揉み倒しますよ～！」 もみもみ……

「や、止めてくう……うひゃん！！／＼／＼／」

「結局……大きくなってたんじゃないですか……」

「あ……文さんがしょっちゅう揉んでくるからでしょう！！／＼／＼／」

嫉妬妖怪で言うど、妬ましいですね……。

あゝあ……振り出しに戻りますけど、何かネタないもんですかね……。

（ん？ 妬ましい……？）

…………あ！

「良いこと思いつきましたよ♪」

” ネタがなければ作る” この鉄則を忘れてましたよ！ これを開催させれば、しばらくネタに尽きることはありませんしね！

「早速行動に移しましょう。まずは博麗の素敵な巫女（笑）に頼まなければなりませんね。

それにしてもこれを提供した樫、いや樫の胸に感謝ですね！」

「わ…私の胸のどこに感謝される要素が！？」

「主に揉んで下さいって誘惑されるところですかね♪」

「それ、文さんだけでしよう！！」

怒っている樫は無視し、早速私は博麗に向けて飛び出す準備をした。

そして、飛び立つ準備が出来たところで…

「良い胸だったぜ！」

と樫に親指を立て見せ、急いで飛び去った。
これ言うと、樫がめっちゃくちゃ怒りますし、さっさと逃げた方がいいです。

「あやさーん!! 帰ったら覚えて下さいよー!!」

~~~~~

「さて…博麗神社、到着♪」

ものの数分で、神社に着きましたけど、霊夢さんはどこにいますでしょうか？

「まあ、居るかどうかはこれで分かるんですけどね」

私は、賽銭箱にお金を入れる（1円）

チャリーン…

「ようこそ!! 我が博麗へ!!」

目の前に瞬間移動し現れた、素敵な巫女…。

「来るの早いですね…」

瞬間移動とはなんと便利だろう……って私は思いますよ…。

「って…なんだ、誰かと思ったら文なのね…。何か用…?」

笑顔から私を見た途端に、複雑な表情になる霊夢さん。

おそらく、私の取材を受けたくないのと、お金を入れてくれたとで戦ってますね…。

「今回は取材じゃありませんよ。明日の宴会でお願いをしに来たんです」

「だったらそうと、早く言いなさいよ。っで何?」

(当たってるんですか…)

「えーと…実は…」

「嫉妬大会…ね…」

「そうなんですよ!　そしてあわよくばネ…いや、誰が優勝するか見たいんですよ!」

危ない危ない!　思わず言ってしまうところだった!

「ネタ作りか何か知らないけど、縁側でやるなんていい迷惑だわ。でも、私の条件を揃えられたらやってもあげても良いわね…」



聞こえてましたか……っていうか、

「条件とは？」

「そうね…まず、お手伝いさんを三人くらいほしいわね…」

なんだ、そんなことですか！

「大丈夫です♪ 心当たりは結構ありますし♪」

まず、柊は強制参加。

次に永遠邸の兎の…確かうどん何とかだっけ？ とにかく、その兎。仮に永琳さんに何か言われても、実験体<sup>はたて</sup>を持つてくればことに足りますよ♪

そして、白玉楼の庭師、妖夢さん。幽々子さんには食べ物を持っていけばいい！ これで完璧！！

「後、一人三分にしなさいよ。過ぎたりしたら殺すから」

「平然と怖い発言しますね…。巫女さんが殺すとか言っちゃダメですよ」

「これが私のスタイルよ。何か文句ある？」

ありませんけど、巫女としてどうかと…

「まあ、三分の所も同意しますよ…」

「後、最後に!!」

霊夢さんが一番辛抱強く言ってきた…。

こんな真剣な顔になるなんて…最後は結構大変かもしれませんね。

「もし、やるならお金入れなさい!!」

やっぱり霊夢さんは霊夢さんですよね…。

## 閃いたアイディア (後書き)

文「さてと、次にやることは…」

## 策士！ 射命丸文（前書き）

霊「そういえば、人里にダウザーのネズミ妖怪がいたわね…」

文「！ 貴重な情報ありがとうございます♪」

## 策士！ 射命丸文

### 【文視点】

さて：一応、霊夢さんにお金を払った私こと射命丸文は、今とある場所にいるある妖怪に会うため移動中です。

「5万はちよつと痛かったですけど、ネタのためなら仕方なしですよね」

そんな私の次に向かった先は：

~~~~~

「えーと：目撃者（霊夢さん）の話ですと、人里のこの辺りに…」

私は空中から目を細めて探す。それにしても本当に彼女がここに來てるんでしょうか？

「ここに来る妖怪はすぐ見つかるはずなんですけどね…。それにあの容貌は、注目されそうですし…」

そう言いながら斜め右を見る…。

「……こう言ったらすぐ発見できましたね♪」

あの耳に尻尾……間違えないです♪ 私はゆっくりと高度を下に下げ、彼女の後ろに気づかれないように回り込んだ。

「うーん…またご主人は――」

「あやややや…清く正しく射命丸です!!」

「うわ!？」

いきなりの私の自己紹介に、驚いた彼女は勢い余って転ぶ。

「ナイスリアクションです♪」

そんな彼女に私は親指を突き立てる♪

「な…なんだね君は!？」

「毎度おなじみ射命丸文ですよ、ナズさん♪ それにしても良い転けっぷりでしたよ♪」

そう、霊夢さんの話して次に会おうと思ったのが、ネズミの妖怪

でダウザーのナズーリンさん。

会おうと思った理由は……っと、今は立ち上がったナズさんが顔を赤らめながら怒ってるので後ですね♪

「わ、私が集中してご主人の財布を探してるときに、君が後ろからいきなり自己紹介してくるからだろう!!／／／」

「すみません♪ すみません♪」カシャ

「それで謝ってるのか君は!？ それとなんでカメラを撮る!？」

「いやゝゝゝ 赤らめたナズさんが可愛くてゝ♪」

「な…何を言ってるんだ君は!!／／／」

ふふふ…また顔が赤くなってますよ♪ どうやら”可愛い”という単語に慣れてませんね♪

彼女をネタにする予定はなかったんですけど、ついでにやつちゃいましょうか♪

「いや本当ですって♪ もちろん普段のナズさんも可愛いですけど、赤らめたナズさんは更に可愛さが倍増してますよ♪

男性が見たらあまりの可愛さに、興奮して鼻血を出してると思いますね♪」

「わ…わ…私がそんなに可愛いわけないだろ!!／／／」

「いやいやゝゝ、私が見た中では、可愛さランキングで樫を抜いてトップになってますよ♪」カシャ

「だ、だからカメラ撮るなあ!!／／／／」

幻想郷の紳士諸君！ 想像してみてください…。

顔は元より耳まで真っ赤になり、上目遣いで睨みながらこっちに近づいてくる彼女を…♪

「ふふふ…そんなこと言って、本当はカメラに”少々”撮られるのが好きなんじゃないんですか？」

「何を根拠にそんなことを!!／／／／」

「だって、本当に撮られるのが嫌いなら私のカメラを奪い取ってもいいはずです♪ それをしないということは…」ニヤ

「す、好きなわけないだろう!! き、君は馬鹿だな!!／／／／」

ガチャン！

「録音かんりょーです♪」

「な!？」

私の武器がカメラだけだと思っているあなた…勘違いしてるんじゃないですか♪

私は懐に入っていた物を……高く掲げた！

「小型録音テープです♪ にとりが特別に作ってくれましたー♪
それではその声を聞いてみましょう♪」

ガチャン！

「本当は・・・しょう・・・が好きなんじゃないですか？」

「す、好きなわけないだろう！！ き、君は馬鹿だな！！」

ガチャン！

「くくく・・・」

「な…何でご主人の名前が…！？」

驚いている彼女にネタばらしです♪

「この録音テープは細かい動作が出来るんですよ♪

つまり、聞き撮りたい部分だけ撮ることが出来るってことです♪」

私が”少々”の所を強めたのは、彼女のご主人の名前が虎丸星^{とらまるしょう}だからです♪

「さて！ ナズさんは否定はしますが、明らかにこれはご主人にツンデレで好きてことですね♪

これを元に早速新聞に載せなくては！！」

「待て!! 明らかに君がやったことだけどちよつと待てえ!!」

ナズさんはそう言いながら、私の腕を掴み飛ばないようにしてきた。

「…やっぱり載せてほしくないですか？」

「当たり前だ…。嘘情報を流され、真に受ける奴がいたら堪ったものじゃない!」

「そうですか…。なら取引しませんか？」

正直、ついでが本題の糧になるとまでは考えてませんでした。が、せつかなので利用しましょう…。

「取引だと…?」

「ええ、このカセットと、名のある宝石との交換…」

「……何が狙いだ」

ナズさんは真剣な表情で、ダウジングを私に突き立てる。

「いや、狙いとかそういう訳じゃなくてですね…。

気になるんですしたら、明後日まで周りに口外しなければ、話してもかまいませんよ」

「……しないよ。それに口外したら新聞に載せる策略だろう?」

「おお！ この短期間で私というものの性格を読むとは…」

「いや、誰だって分かると思うんだが…」

まあ、面白いネタを捕まえるため、あらゆることを利用するのが私ですからね♪

「分かりました。話しましょう♪」

「……と言うことです」

「なるほど……つまり、優勝者のための商品の宛がない。それで、ダウザーの私に探させようと…」

事情を知ったナズさんは、ため息をつきながら繰り返す言う。

「一つ、君に聞いてもいいか？」

「何ですか？」

「必ずしも名のある宝石じゃないとダメなのか？」

「ダメです♪」

「何故？」

「だって、優勝者にはそれなりの宝石を贈りたいじゃないですか♪」

「君がそんな風に考えるのは、もの凄く考えられないのだが…。考えられるとするとネタだね」

流石に私の性格が分かってきただけのことはありますね♪

「別に探さなくてもいいんですよ♪ その時はその時で…」

「分かったよ。探すよ…」

交渉成立♪

「ナズさん、ありがとうございます♪ 明日の宴会までお願いしますね♪」

「ああ…。君もちゃんとカセットを…」

「分かってますよ♪ 可愛いナズさん♪」

「可愛いは余計だ！ さっさと行け！！／／／／／」

「ふふふ…それじゃあ、楽しみにしてまーす♪」

私はナズさんを残し、人里を後にした…。

「はあ……ご主人の財布もあるし、帰るのが長引きそうだ…」

策士！ 射命丸文（後書き）

文「ついでに寄ってきました♪ これはつまらない物ですが…」

星「こ、これは…！」

文「どうですか？ 部下が赤らめた表情は…♪」

星「可愛くて…直視できません…！」

こ、これどうしよう…どうしよう…／／／／

文「ふふふ…じゃあ、私はこれで♪」

交渉成立♪（前書き）

文「ネタを作るには、それ応答の代価が必要です♪」

ルー「そーなのかー？」

交渉成立♪

【文視点】

「こんにちは♪」

ナズさんに依頼を頼んだ（強引に）私の次に行った場所は…

「!？ 何やつ!！」

「鴉天狗ごと射命丸文ですよ、妖夢さん♪」

亡霊姫の西行寺幽々子と、その家師の魂魄妖夢がいる白玉楼…。
理由は、もちろん霊夢さんに言われた人材確保♪

「文さんですか……取材ならお断りしますよ」

庭の掃除に励んでる妖夢さんは、明らかに嫌そうな目を向けて言う…。

霊夢さんの時もそうでしたけど、私が来た〓取材をするじゃあり

ませんからね！

「今回は取材じゃないですよ。あなたの主にちょっと頼みたいことがあって来ました」

「はーい♪ 食べられるために来たのなら、喜んで食べてあげるわよ♪」

……後ろの声で寒気を覚え、振り向くと、

「いきなり私の後ろから現れないでくださいよ…幽々子さん。それに食べられたくもありません…」

「残念♪」

残念って…あなたに食べられるためにここまで来る自殺希望者はいませんよ…。

「それで、頼みたいことって何ですか？」

「ああ、そうでしたね」

話しが脱線しかけたが、妖夢さんがカバーしてくれた。
ご協力感謝します…明日、霊夢さんに扱くき使われることも♪

「明日の宴会のお手伝いとして、妖夢さんを少し借りたいんですが……」

「あら、妖夢のレンタルの依頼ね。いいわよ♪ ドンドン使って♪」

……案外、呆気なかった。一応、対策も取ってあったのに……

「ちょ……幽々子様！ 何か凄い軽いんですけど!?!」

「あ！ その前に妖夢のことで一つ忠告があるわ」

「無視しないで下さい!」

いきなり真剣な表情で私に言う幽々子さん……。いつもの緩い表情が微塵も見えない。相当気にかけてるのでしょうか？

「妖夢は……夜が凄いから気をつけてね♪」

「真顔で変なこと言わないで下さい幽々子様!!!／／／／」

「そっちの方向で使う予定はまったくありませんので安心して下さい」

使ったらこの小説、終演を迎えますよ……。

「だって作者困らせたいじゃない♪」

raito「ふ…ふっざけるな〜!!」

~~~~~

とりあえず白玉楼の方は交渉成立でしたので、次はここですね♪

「こんにちはー♪」

コン♪

どっからか分からないが、到着同時に弓矢が飛んできて竹に刺さ

る。その弓矢に紙が結びついてて…

「取材、お断り」

…と書かれてあった。

「えーりんさん、あなたもですか…。っっていうか、何で弓矢に？」

コン♪

「忙しくて、話す余裕がないわ」

いや、現にこうやって話してる余裕ありまよね…。まあ、とにかく、

「取材じゃありませんよ。ちょっとお願いです。」

あなたの兎…。うどん何かを宴会の手伝いとして借りたいんですか…」

私がこう言うと少し時間が空き、

コン♪

「代わりの実験体は用意出来るかしら？」

　　と返事を返してきた。

「もちろん！　現在、それがここに向かってますよ♪」

コン♪

「貸しましょう♪」

「ふふふ…悪いですね♪」

「な…文！　あんた永遠亭にネタがあつて、それを私にやるとか  
言いながら、何で張本人のあんたがここにいるのよ!!」

ベストタイミング♪　北海道はたて♪（正式　姫海棠はたて）

「えーりんさん。この天狗でーす♪」

「ちょっと無視する——」

ズッサ

「あややー…頭にどストライクですねー。でも、大丈夫なんですか？  
頭に当てちゃって…」

コン♪

「妖怪は頭にナイフ刺しても死なないでしょう♪」

「確かにあの門番がいい例ですね。あつ、じゃあ私はこれで♪」

ほたて…悪く思わないでくださいね♪

これもネタを作り出すための犠牲なんですから…♪

**交渉成立♪（後書き）**

文「…っというわけで樫もお手伝いお願いねー♪」

樫「どういうわけですか!!」

勝手に私をカウントしないでください!!」

文「樫の危ない写真バラマコウカナー♪」

樫「や、やらせて頂きます!!」

**ある意味似ている三人？（前書き）**

本編、第十二話 宴会1の正午です。



ある意味似ている三人？

【妖夢視点】

「はあ…」

宴会当日の正午……私は博霊神社の真ん前に来ていた。

理由は昨日、幽々子様が文さんの頼みを”簡単に”引き受けてしまったわけで、お手伝いさんとして宴会の準備をするためである…。

「はあ…」

別にお手伝いさんとして駆り出されるのは良いんですけど、その相手が霊夢さんはちよつと……下手すると奴隷みたいに扱われるかもしれないね…。

「「はあ……あれ？」」

今……ため息が被った…？ 私はため息がした方向に振り返ってみると……

「……犬？」

「ち、違います!! 狼です!!」

狼ではなく犬と間違えそうな白狼天狗は、犬徒櫛さんという妖怪で…

「失礼なこと考えてませんよね…」ジッ

「か、考えてませんよ！　そ、それよりお互い大変ですね！」

どうやら私と同じ理由でここに来たらしい…

「あ、そうですねー…。どうせコキ使われるは見えてますし…」

「でも、行くしかないですよ…。霊夢さんの性格上、来なかったら半殺しにされます…」

「ですよねー…」

まあ、仲間がいたのは心から嬉しいですけどね…

「「「はあ…」」」

ん？　また、ため息が増えたような…

「確かに師匠の実験から逃れたは良いんですけど、何もお手伝いに出さなくても…」ブツブツ

ブツブツ言う声が聞こえたと同時に、私のちょうど横から兎の耳が特徴的な人がゆっと横切ってきた…って、

「……鈴仙さん？」

「まったく、私の同意も……あれ？ 妖夢さんに椀さん？」

振り返った鈴仙さんは、私たちに気づきキョトンとした表情になる。

「……宴会はまだ始まってないですよ？」

「それは分かってます。今の時間帯にここにいるのは多分鈴仙さんと同じ理由です」

「私も同じです」

「え？」

「……つまり二人も私と同じ理由と？」

「「そうです」」

私たちはこの時間帯にいる理由を簡潔に話した所、やはり鈴仙さんと同じ理由だったらしい…。

「はぁ……何か苦労してますよね、私たち…」

「私たちは苦労するポジションだから仕方ないですよ」

「樫さん…言ってて悲しくありませんか？」

「すみません。言ってて悲しくなりました…」

そう樫さんが言うため息……これで何回目でしょうか…。

「とにかく何でもいいからストレス発散したいです…」

「私です…」

「なら、私たちで愚痴を言い合えばいいじゃないですか…」

ただ適当に何気なく言っただけだった……しかし、

「……それだ」

「え？」

まさか、二人がこの言葉に乗るとは…

「じゃあ、私の愚痴から始めます！」

「はや!？」

いきなりですか樫さん!!　　ていうか始めて良いんですかコレ!？

「昨日だけじゃないんですけど、また文さんが私の胸を揉んできたんですよ」

しかも、初っ端が危なそうな内容!?

「しかも、文さんが胸が大きくなったと感じたら、私の証言があるまで永遠に揉んでくるし…」

「きっと嫉妬してるのよ♪ あの時天狗って胸はあまりないし♪」

ちょ、鈴仙さん! 張本人に聞かれたら吹っ飛ばされますよ!!

「そうなんですか?」

「そうよ♪」

「……そう思うと気持ちになりました♪ 文さんは嫉妬してますよね♪」

橿さーん!!

「次は私ですね。毎日のことですけど師匠の実験に付き合わされます…」

「うわぁ……大変ですね。具体的にはどんな?」

「主に師匠が作った新薬を飲まされます……こういう薬かも分からないまま」

そ、それはちょっときついかも…

「実際危なかったことはあります?」

「あるある！　いきなり耳が伸びたり縮んだり、挙句の果てには取れたり」

「「え!？」」

耳だけに耳を疑いたくなる…。

「と、取れたんですか!？」

「うん、そして付け替えられた」

「「……」」

「う、嘘ですよ！　ジョーク!!　大体耳が取れるわけないじゃないですか!！」

そう言う割には本当に聞こえましたけど…

「そ、それより妖夢さんはどうなんですか？」

「え？　私ですか？」

えーっと……って、

「や、止めましょうよ！　実際に聞かれたら何されるか…」

「斬りつけばいい話です♪」

「狂気の目で幻覚を見せましょう♪」

「二人とも怖いですよ!!」

結局、この後、私も混じって数時間愚痴を言う合うことに……仕方なくですよ!

「……というわけで幽々子様の食には困ってるんです」

「毎日お疲れ様です……」

でも、少し悪くないかも……

「でも、それらに勝ってる霊夢さんたちは地味に凄いですね……」

「確かに……」

そう思うとそうですね……。

「異変の時も私は相手にもなりませんでしたし……」

「柊さんに同じく」

「わ、私もちよつと……」

でも、こう考えれると……

「あの時は鬼が通ったと思いましたよ! 特に霊夢さんが!」

「さっきから一言多いですよ柊さん!! 確かにそう思わないこと

もなかったですけど――」

「そうですよね！ 本当に鬼が通ったかと思いましたよ！」

「鈴仙さんも乗らないでください!!」

ここは博麗神社ですよ！ こんなことを話してるのが聞こえたら

「ふーん……だれが鬼なのかしら…？」

「「そりゃあ、霊夢さ……」」

「文が寄越したのはコイツ等かしら？ まあ、良いわ。みっちり鍛えてあげるわ…」 ポキバキ…

私たちの後ろから聞き覚えがある声が聞こえた…

「い、いや、鬼のことだか何だかさっぱり……」

「う、後ろから反対です！ た、対応できません！」

「ふ、二人とも意外に余裕ありますね!？」

「三人とも遺言は済んだかしら…？」

三人!？ 私も入ってる!？



「れ、霊夢さん。ここは話し合いを――」

「問答無用!! 霊符『夢想封印』!!」

……これから三人とも気をつけましょうね♪  
b y r a i t o

ある意味似ている三人？（後書き）

霊「ほら、次は皿をあの手から百枚用意！ 壊さずにちゃっちゃんとやること！」

椀「ひ、酷い！ こんな準備は天狗でも出来るわけない！」

鈴「霊夢さんも手伝ってくださいよー！」

妖「何で私まで…！」

霊「ああん！？」

三人「はい！！ やらせて頂きます！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7851r/>

---

希望の光 外伝

2011年11月14日22時31分発行